目崎先生を憶う

目崎先生がＯＲと深いつながりをもつようになったのは，昭和30年頃からだったように記憶する．当時の日本は，いわゆる戦後をようやく脱し，産業界も品質管理，事務合理化の洗礼を受け，経営における科学的手法に関心をいだき始めてきていた．日本に始めて電子計算機が入ってきたのもこの頃である．当時はまだＯＲのようらん期であったのである．

昭和30年というと，われわれの阪大経済学部ではまだ統計学講座が設置されておらず，目崎先生は経営学第一講座の主任教授であり，統計学担当の筆者はその講座の助教授であった．もともと経営学における数学的アプローチに深い関心をもち，数学の勉強を熱心にやっておられた目崎先生は，ＯＲの勉強を行っていた当時の若いグループにとっては良き理解者であり，暖い保護者でもあった．この頃から阪大のグループで手がけてきたマクロスキー，トレフセンの『経営のためのオペレーションズ・リサーチ』の翻訳が完成し，目崎先生，大沢豊氏および筆者の共訳として刊行されたのが31年の夏である．

昭和29年のクリスマスの後デトロイトで開かれた計量経済学会に出席し，その後 2，3 の大学をおとずれ，30年３月に帰国した筆者は，目崎先生に対する報告の中でＯＲ研究促進の重要性を強調し，経営科学のための組織化された研究体制の必要性につき目崎先生としばしば話しあったものである．かくしてうまれたのがインダストリアル・アドミニストレーション・リサーチ・グループであり，目崎先生を中心とし，神戸大学の水谷一雄先生，阪大の大沢豊氏および筆者等の参加した小さなグループであった．この研究グループはしばしば会合し，いくつかのディスカッション・ペーパーを出し，海外との研究上のコミュニケイションをはかった．このグループを母体として約１年の後に経営科学協会がうまれたのである．

関西では，昭和27～8年頃，大阪府立産業能率研究所の援助で，品質管理研究の一環としてＯＲがとりあげられ，研究会がしばしばもたれていた．この研究会のチャネルを通じて，前述のリサーチ・グループを中心として，昭和32～3年頃関西で経営科学協会が設立された．この協会は経営科学の進歩および普及をはかるため，学界，産業界が互いにコミュニケイトし，協力して研究を進める場をつくることを目指したもので，産業界の支持で，学界および産業界の研究グループの手によって設立されたものである．そしてこの協会の代表理事には目崎先生になって戴いた．この協会は短い期間であったが非常に積極的に活動した．公平無私，学問に情熱を打ち込んだ目崎先生の人格は，この協会を維持するために多くの努力を払った若い研究グループの精神的支柱であった．そしてその成果はこの協会によって発刊された『経営科学』第１巻および第２巻の中に見ることができる．

約２カ年の活動の後，経営科学協会は，日本ＯＲ学会の設立にさいし，それに合体することになった．そして『経営科学』はそのまま号数を引きついでＯＲ学会の機関誌となったのである．このような意味で目崎先生はＯＲ学会産みの親の一人である．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

12月15日，いまにも降り出しそうな冬空の下，南郷山の御自宅を出る先生の柩を見送りながら，筆者は先生の人柄を偲び，去来する思い出に心を奪われていた．目崎先生はきびしさをもっていた．その厳格さは，その底にただよう温情を厚くおおっていた．浅薄さの支配する今日，先生はやはり古き良き時代の人であった．われわれの間にはいくつかのエピソードが残っている．

某日先生は百貨店の園芸部に立ちよられ，花の種子を買おうとされた．あいにくその種子は品切れであった．これを聞いた先生は売り子に言った．「それでは入荷したらすぐ電話してくれ給え．」売子は先生にたずねた．「おいくら程用意したらよろしいでしょうか．」すると先生は答えたものである．「なに，家で使うんだから10円程でいいんだ．」

先生は学界に入るまでずっと住友に居られた．先生は企業の世界で長い期間を過し，その間，多くの学問的業績を残し，東京大学から経済学博士の学位を授与され，産業を通じた広い人間社会と学問的研究とをアマルガメイトできた稀れな人物であった．視野の広さと人物の大きさとは学界の上を行き，専門的知識を追求する情熱は産業界を超えるものがあった．ＯＲを発展させて行く真の力は先生のような深い考え方からうまれるものである．先生なきいま，遺著となった『近代経営学とミクロ分析——企業の生成発展の理論』は，最近の先生の思想を良く伝えている．

アンソニーは「ＯＲはすでに一つのプラトーに到達し，近い将来には主要な概念的進歩はないように思われる」といっているが，ＯＲの発展のためには，このプラトーを脱し，価値の科学へと進まなければならない．科学における人間的ファクター，精神的ファクターがより増大して行くことは，今日余りにも形式科学的である科学への挑戦である．今日コンピューターの進歩に対し，われわれの恐れるのは機械が人間に代り人間のように思考することではなくて，人間が機械のように思考することである．実学を離れ，より広い視野で，より深くＯＲを理解する先生をうしなったことは，われわれＯＲを勉強する者皆にとっての損失である．

——万法一に帰す．その一何処に帰すか——(目崎先生著書における引用の再引用)

(1970. 2. 27. 横山　保)

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．